

『サザエさん』を教材とした、高齢者理解の授業効果と課題

鴻上 圭太*、石田 京子**

要約

介護実習指導の授業で、高齢者の生きてきた時代を知り、高齢者に対する理解を深めるために、『サザエさん』の漫画を教材として授業を行った。授業を受けた学生のうち協力を得られた20人の学生にインタビューを行い、その内容をグランデッド・セオリーの手法を用いて分析した。その結果、〈文章に対する拒否的感情〉、〈絵・漫画の持つ日常性〉、〈サザエさんのもつ教材としての魅力〉、〈知識から理解への転換〉、〈学習意欲のはずみ〉、〈単独教材としての限界性〉の6つのカテゴリーを抽出した。

学生には、〈文章に対する拒否的感情〉があり、その背景から『サザエさん』は、学生にとって〈絵・漫画の持つ日常性〉をもつ教材となっていた。そして、戦後から現在まで継続されていることや4コマ漫画ということからの〈サザエさんのもつ教材としての魅力〉が、学生の高齢者理解を深め、期待した学習効果としての〈知識から理解への転換〉が行われていた。その上、予想外の効果として〈学習意欲のはずみ〉が学生の中にみられた。しかし、『サザエさん』だけでは〈単独教材としての限界性〉があり、今後は他の教材との併用が必要であることが明らかになった。

キーワード : 実習指導 高齢者理解 漫画 『サザエさん』

2009年10月7日受理 (教育研究)

はじめに

高齢化が今後も進んでいくわが国の社会において、介護の担い手となる介護福祉士への期待はますます高まるばかりである。その背景には、現在の介護報酬額では十分に介護職員（介護福祉士やヘルパーなど）を雇用できず、少ない介護職員によって高齢者の介護にあたっている事業所も少なくない。そのようなところでは介護職員は無駄な時間をなくし効率的に動くことを求められ、介護労働がルーティンワークの連続となっている実態がある。高齢者のニーズを真に理解し、求められる介護を提供することこそ社会から寄せられる介護職員への期待である。それには、高齢者理解がまず必要である。

高齢者理解には、その人の生きてきた時代や生活を理解することが求められている。しかし、介護福祉士

を目指し養成校に入学してくる18～19才の青年の生活背景は、高齢者の生きてきた時代とは全く異なっており、学生にとっては未知の世界となっている。高等学校で歴史を学んでも生活史を学ぶことはなく、高齢者と暮らしている学生も少なく、高齢者の生きてきた時代を知る機会も減っている。

そこで、昭和20年代から40年代という、現在の高齢者が最も生き生きと生活していた時代を時事問題も取り入れながらユーモアをもって描かれている、漫画『サザエさん』を教材として使用し授業実践を行った。日常生活を題材に物語りを展開している『サザエさん』の、生活の事象をリアルに表現した描写から、学生が高齢者理解を得ることを期待した。

医学中央雑誌 Web 検索によると、漫画を使っの教育実践に関する収録論文は、1992～97年では1本

* 大阪健康福祉短期大学

連絡先：鴻上圭太

〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8

大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科

E-mail : k.kougami@kenko-fukushi.ac.jp

** 大阪健康福祉短期大学

であったのが、1998～03年では4本に、2004年～09年では19本に増加している。漫画が教育実践に活かされつつある事実が、これらから理解することができる。

本研究では、『サザエさん』を教材として使用し、学生の利用者理解への授業効果について検証しつつ、教育実践における漫画の効能についても検証した。

I. 研究目的、調査方法、調査対象

1. 研究目的

介護実習指導科目における、漫画『サザエさん』を教材として使用した高齢者理解の授業効果を明らかにする。

2. 研究対象とした授業内容

20年台、30年代、40年代の時代について、学生をそれぞれグループに分け、予め用紙に「時事・事件」、「物価」、「文化（服装、食生活、家具、電化製品、流行）」、「地域の様子（乗り物、店舗）」、「その他」と、調べるべき課題を設定した。学生には、①それぞれの課題に対し、漫画『サザエさん』¹から該当する描写を選びそれをコピーし、用紙に切り貼りする、②『サザエさん』から選び出した描写に関連する出来事を調べ²、補足的に記述する、ことを求めた。

課題作成作業に1コマ（90分）、作成したものの発表に1コマ（90分）の授業時間を使用した。

3. データの収集方法

データ収集は大阪健康福祉短期大学介護福祉学科（以下、本学介護福祉学科）I部及びII部の学生を調査対象者とし、2名から5名のフォーカスグループに分け、半構成面接による聞き取り調査を行った。調査対象者は合計20名である。各フォーカスグループの調査日、人数は表1の通りである。

表1 フォーカスグループの構成と調査日

所属	学年	人数	調査日
介護福祉学科 I 部	2年	5名	2009年7月28日
介護福祉学科 II 部	2年	2名	2009年8月4日
介護福祉学科 I 部	1年	5名	2009年8月5日
介護福祉学科 II 部	1年	3名	2009年8月5日
介護福祉学科 II 部	3年	5名	2009年8月21日

各フォーカスグループにおける調査時間は、約40分であった。『サザエさん』を教材に使用した授業か

らどのように高齢者の生きてきた時代背景を理解したか」をテーマに面接による聞き取り調査を行い、逐語録を作成した。

4. 調査対象者の属性

本学介護福祉学科 I 部1学年・2学年の学生10名（男性6名、女性4名）及び介護福祉学科 II 部1学年・2学年・3学年の学生10名（男性6名、女性4名）を対象とした。

尚、調査対象者の選定にあたっては、調査結果に大きく影響を与えるほどのバイアスがかからないとの判断から、調査対象者選定の基準を特に設けることはしていない。

表2 対象者の属性

所属	性別	平均年齢
介護福祉学科 I 部	男6名	19.1才
	女4名	19.2才
介護福祉学科 II 部	男6名	29.6才
	女4名	34.5才

5. 分析方法

半構成面接による聞き取りの記録から作成した逐語録をグランデッド・セオリーアプローチ³の方法を用いて分析した。

《》はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリーを示す。

6. 用語の定義

本研究において、使用する主たる用語を以下のように定義した。

- 1) 『サザエさん』：書籍として発行されている四コマ漫画の『サザエさん』を指す。TV等で放送されているアニメではない。
- 2) 漫画：絵によって表現されているストーリー性のある描写体。
- 3) 高齢者理解：高齢者の生きてきた時代やその背景。時代ごとの出来事や生活道具等への理解も含む。

7. 倫理的配慮

調査対象者には、面接の実施においてはどのような発言があろうとも授業単位とは関係のないこと、聞き取りの際の録音については本人のプライバシーを遵守することを伝え、同意を得た。

表3 授業前の学生の状況

カテゴリー	サブカテゴリー	初期コード
《学生の文章に対する拒否的感情》	＜文章に対する拒否感＞	・活字が苦手 ・文字だけだと理解できない
	＜文章による理解の困難さ＞	・文章だけなら大きさもイメージがつかない

表4 授業からの効果

カテゴリー	サブカテゴリー	初期コード
《知識から理解への転換》	＜自己体験と昔の暮らしのつながり＞	・うちのおばあちゃんちは今でも（サザエさんに出てきた）五右衛門風呂みたいな風呂だ
	＜学びの蓄積による理解の深まり＞	・今介護過程を学んで、高齢者の行動などがわかってきた今なら、もっとサザエさんを理解することができると思う ・これまで、小中高で歴史を学んだが、それぞれの時代の庶民の文化がわかる
	＜昔の暮らしに対するイメージの具体化＞	・そんな話を小学校1年か2年のときに聞いたことが、多少はサザエさんを読んでイメージに繋がった
《学習意欲のはずみ》	＜学習意欲の引き出し＞	・サザエさんなら勉強しようと思う。漫画という教材が、画期的に思う ・もっと授業での時間が欲しかった。漫画を読む時間が欲しかった。 ・前に高齢者の方から昔の話を聞いたことがあるが、「そうなんや」くらいにしか思わなかった
	＜新たな学習意欲の創出＞	・去年の先輩が作ったものを見てみたい。視点が違うはず ⁴ ・サザエさんのわからないことが、興味を引いた。勉強するきっかけになった

II. 結果

学生の面接による聞き取り調査時の録音記録から、157の逐語化したデータが得られた。157の逐語化したデータを分析、概念化した結果、『サザエさん』を教材に使用した授業展開における高齢者理解への授業効果について、6つのカテゴリーと21のサブカテゴリーが抽出された。

6つのカテゴリーは学生の学びにおける効果と『サザエさん』という教材における評価、そして学生の背景を現すものと分けられる。つまり、学生の学びの効果のみならず、『サザエさん』という教材がもつ学習効果とその限界、学生がもつ学習に対する背景が本

研究で明らかになった。

1. 授業前の学生の状況 《学生の文章に対する拒否的感情》

学生は“活字が苦手”や“文字だけだと理解できない”などの＜文章に対する拒否感＞をもっていた。また、“文章だけなら大きさもイメージがつかない”という＜文章による理解の困難さ＞を感じた。

学生の背景には、このような《学生の文章に対する拒否的感情》があった。

2. 授業からの効果

1) 《知識から理解への転換》

学生は『サザエさん』を読んで、“うちのおばあちゃんちは今でも（サザエさんに出てきた）五右衛門風呂みたいな風呂だ”と、＜自己体験と昔の暮らしのつながり＞ができた。また、“今介護過程を学んで、高齢者の行動などがわかってきた今なら、もっとサザエさんを理解することができると思う”と、＜学びの蓄積による理解の深まり＞が見られた。さらに学生は、“そんな話を小学校1年か2年のときに聞いたことが、多少はサザエさんを読んでイメージに繋がった”と、＜昔の暮らしに対するイメージの具体化＞がなされた。このように、学生に《知識から理解への転換》がみられた。

2) 《学習意欲のはずみ》

学生は、“サザエさんなら勉強しようと思う。漫画という教材が、画期的に思う”と、＜学習意欲の引き出し＞がみられた。また、“去年の先輩が作ったものを見てみたい。視点が違うはず”と、＜新たな学習意欲の創出＞行われた。このように、学生には《学習意欲のはずみ》がみられた。

3. 教材について

1) 《漫画・絵のもつ日常性》

絵に対しては、“話は聞いていたけど、実物を見たことがない。絵を見て「こんななんや」と思った”と、＜絵による理解の容易性＞があった。また、学生にとって“活字本よりは漫画のほうが読む”と、＜漫画のもつ親しみやすさ＞があり、漫画には“生活の中での行動は漫画の描写からわかる”と、＜漫画の持つ理解の容易性＞があった。以上のことから、漫画には《漫画・絵のもつ日常性》があることが確認された。

2) 《サザエさんの持つ教材としての魅力》

漫画『サザエさん』には、“「生活の変化を見ましょう」ならサザエさんでいける”と学生が語ったように、＜暮らしの変化の資料としての優位性＞あった。“利用者の生きてきた時代を大まかにつかむにはよかった”と学生は『サザエさん』から＜時代背景への理解の深まり＞が得られ、“なにかしぐさや行動をしている姿を見て、これなにをしているのかな、とわかるかもしれない”と、＜高齢者理解の深まり＞がみられた。さらに＜昔の暮らしの発見＞があり、“昔の道具だけを

見ても、どう使われたかわからない。サザエさんならそれがわかる”と、『サザエさん』には＜昔の暮らしの理解の容易性＞があった。これらのように『サザエさん』には《サザエさんのもつ教材としての魅力》があった。

3) 《単独教材としての限界性》

ただ、高齢者理解を深めるには、“予備知識として時代背景を事前に学んだほうがサザエさんを理解できる”と＜予備知識の必要性＞や、“サザエさんをじっくり読んだからといって、歴史を知ることはできない”と＜得られる範囲の狭さ＞などがみられ、教材としての限界が認められた。その他『サザエさん』を理解するには、“時代を実際に生きてきて理解している者と、違う時代を生きてきた者とは、サザエさんを読んで捉える意味が違う”と＜暮らしの理解への体験の影響＞があり、＜講義時期による理解の不足＞もあった。また学生からは『サザエさん』を使った教材よりも＜映像教材への要望＞や＜体験談教材への要望＞も出され、『サザエさん』には《単独教材としての限界性》が確認された。

表5 教材について

カテゴリー	サブカテゴリー	初期コード
《絵・漫画のもつ日常性》	<絵による理解の容易性>	<ul style="list-style-type: none"> ・絵で出てくるモノとか服装で時代がわかる ・話は聞いていたけど、実物をみたことがない。絵を見て「こんななんや」と思った
	<漫画の親しみやすさ>	<ul style="list-style-type: none"> ・漫画が嫌いな子もいるが、教科書よりはいい ・活字本よりは漫画のほうが読む
	<漫画の持つ理解の容易性>	<ul style="list-style-type: none"> ・文章よりは、漫画のほうが理解しやすい ・生活の中での行動はマンガの描写からわかる
《サザエさんのもつ教材としての魅力》	<暮らしの変化の資料としての優位性>	<ul style="list-style-type: none"> ・「生活の変化を見ましょう」ならサザエさんでいける ・継続性という点ではサザエさんが一番。
	<時代背景への理解の深まり>	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の生きてきた時代を大まかにつかむにはよかった
	<高齢者理解の深まり>	<ul style="list-style-type: none"> ・なにかしぐさや行動をしている姿を見て、これをしているのかな、とわかるかもしれない
	<昔の暮らしの発見>	<ul style="list-style-type: none"> ・時代の暮らしの発見があった
	<昔の暮らしの理解の容易性>	<ul style="list-style-type: none"> ・昔の道具だけ見ても、どう使われたのかわからない。サザエさんならそれがわかる ・昭和史の文献よりサザエさんのほうが昔をイメージしやすかった ・歴史の本なら、出来事を並べているが、サザエさんなら暮らしがわかる
	<予備知識の必要性>	<ul style="list-style-type: none"> ・何が面白いのか、意味がわからないこともたまにあった ・予備知識として時代背景を事前に学んだほうがサザエさんを理解できる
《単独教材としての限界性》	<得られる知識の範囲の狭さ>	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の変化はわかるが、時代の変化はわからない。生活を知るならサザエさん。その時代に何が起こったのかはわからない ・サザエさんをじっくり読んだからといって、歴史を知ることはできない ・サザエさんはあくまでも、一つの物差しとしてのもの
	<暮らしの理解への体験の影響>	<ul style="list-style-type: none"> ・時代を実際に生きてきて理解している者と、違う時代を生きてきた者とは、サザエさんを読んで捉える意味が違う ・これまでの経験がサザエさんの理解に繋がる
	<講義時期による理解の不足>	<ul style="list-style-type: none"> ・(サザエさんを読んで) 去年の今頃だとなにをやっているのかわからなかった。
	<映像教材への要望>	<ul style="list-style-type: none"> ・映像のほうがわかりやすいかも
	<体験談教材への要望>	<ul style="list-style-type: none"> ・絵だけを見るよりは、実際に体験した人の話を聞くほうが学習になる ・サザエさんと同時に実際の体験した話がきけたらいい

Ⅲ. 考察

2) 漫画『サザエさん』の教材としての受容に対する二側面

本研究において、学生に対しフォーカスグループによる半構成面接で『サザエさん』を教材に使用した授業の効果について聞き取る中で、漫画『サザエさん』は「とっつきやすい」「理解しやすい」といった声が多く聞かれたが、それは何故かの問いに対する答えには、学生の漫画や『サザエさん』への日常的な関わりにおいて培った志向性と、文章や活字への苦手意識や拒否感の否定的感情の二側面があることがわかった。学生の日常的な漫画志向であることの一側面に、文章や活字の否定的感情の表れである、と捉えることもできるのではないだろうか。だとすると《学生の文章に対する否定的感情》が根底に存在していることで『サザエさん』の教材としての学習効果があらわれていると考えられる。

3. 漫画『サザエさん』のもつ教材としての利点と限界

1) 漫画『サザエさん』のもつ教材としての利点

漫画『サザエさん』を教材に使用することで、学生の高齢者理解に対する一定の効果が認められた。絵や漫画のもつ特性とは別に、漫画という素材で括った場合他にはない『サザエさん』のみが持つ3つの特性がある。1つは、1946年から福岡の地方新聞から連載が始まったことによる、『サザエさん』の描写自体の長期的変遷がある、という点である。2つ目に、1969年からはアニメ化され今日まで放送が続けられており、国民の認知度が非常に高い素材である、という点である。3つ目に、『サザエさん』のテーマ設定の基本が「国民の日常生活の出来事」にある、という点である。これらの特性が、学生にとって《サザエさんのもつ教材としての魅力》を感じさせたと考えられる。1946年を出発点とし、『サザエさん』を読み、分析し、学習を進めていくと、いずれ現代にたどり着く。社会の変遷、暮らし方の変遷、商売の変遷、道具の変遷、服装の変遷、物事の考え方の変遷が読み取れ、面や点ではなく線として歴史を捉えられるのである。

また、『サザエさん』の描写が数十年も以前のものであっても、現代にも『サザエさん』は存在する。学生にとっては今、自らがおかれている時代と、かけ離れた昔の話ではなく、同じ立ち位置に存在する情報源として捉えられた、と思われる。

2) 漫画『サザエさん』のもつ教材としての限界

しかし、『サザエさん』は漫画としての物語のテーマが日常生活に限られているため、漫画『サザエさん』から得られる知識の範囲も限られ、学習の効果には限界がある。よって期待する学習効果や学生の状況によっては限界を補完する工夫が必要であろう。特にサブカテゴリとして抽出した《暮らしの理解への体験の影響》は、暮らしに対する実際の体験がより『サザエさん』を理解することに繋がり、結果として《知識から理解への転換》として学習効果を得ることをあらわしている。しかし、根岸ら⁵が、学生は「高齢者の理解の仕方として、身近な祖父母に置き換えて理解する傾向」があるというように、本学介護福祉学科の学生も日常生活の中で高齢者と接する機会や、高齢の家族と同居しているという環境が高齢者理解に一役買っているといえる。しかし核家族化が進行する今日において、そういった環境がある学生は極めて少ない。この点を押さえつつ『サザエさん』のもつ教材としての限界をどう克服するのか、今後の課題といえる。

一方、学生が感じている教材としての限界の方向は一方方向ではない。『サザエさん』という教材から学んだことで高齢者理解に対し、さらに興味を引き出し「もっと知りたい、でも『サザエさん』からはこれ以上の知識は得られない」と感じた学生と、他方では漫画を能動的に「読む」よりも、「映像を見る」や「語りを聞く」といった受動的態度をもって行う学習スタイルを望む学生が存在することも、考慮して行かなければならない課題である。

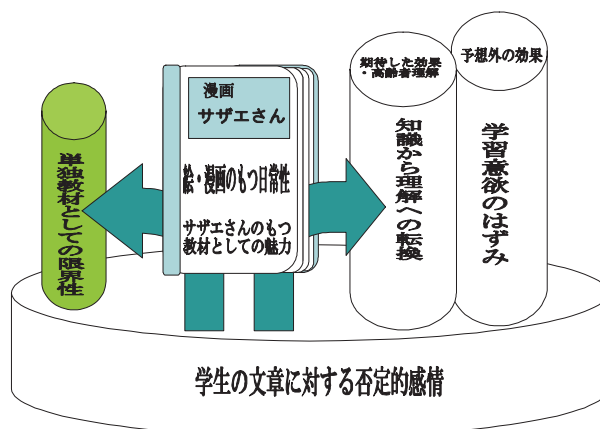


図1 学生のもつ背景と授業の効果、教材の限界の関連

3) 学習意欲の引き出し

本研究において《知識から理解への転換》は予想し

た効果であったが、《学習意欲のはずみ》は予想外の効果であった。これは、『サザエさん』から知識として得ることができたり、過去の体験やこれまでの学習と結びついて、高齢者理解に対しよりイメージができたことにあわせて、『サザエさん』を読んでわからないことに対して興味を持つことができ、結果的に『サザエさん』が学習のインセンティブになったということである。

4) 『サザエさん』を教材とした授業の効果

本研究から、教材とは単なる資料ではなく学生の学習への意欲をも引き出すツールであることがわかった。よって教材選びとは、学生の学習能力や志向性(とりわけ日常生活をも含む)を視野に入れ、学生の教材に対する受容と、期待される学習効果のバランスにおいて行われるものである。授業における学習の効果についてのみ追い求めがちであるが、学習の効果の根底には学習への意欲が存在することを、改めて認識させられた結果となった。

また、教材としての『サザエさん』が学生にとって受容しやすく高齢者理解につながっている背景に、学生の活字や文章への否定的な感情があるということが見えたのは、研究の成果である。活字や文章に対し否定的な感情を持つ学生は、これからも存在し続けることを予測するならば、高齢者理解の学習方法として、漫画『サザエさん』を教材として発展させていく必要があるだろう。宮口ら⁶は「学生はマンガの場面から速やかに情報を得ることができ」、漫画は「文章だけの表現よりも魅力を増し関心を高めることができる。」と述べている。宮口らは看護教育で「マンガ」という素材を教材として使用している。また、竹村⁷は「マンガ教材で具体的に高齢者虐待をリアルに表現した内容のものを学生に提示することで、学生はテキストを読んだり、教員からの説明を聞くよりもかなり具体的に状況の理解ができ」る、と述べ、学生に対する「マンガ」の学習効果を認めている。以上のことから、『サザエさん』は学生の高齢者理解を深めるための教材として、有効であると考えられる。

5. 今後の課題

課題は《単独教材としての限界性》をどう克服するかである。課題のポイントを2つあげる。1つは、『サザエさん』を教材として使用し高齢者理解への授

業を展開する際、補完的な学習(事前学習もしくは他科目とのリンク)や資料準備が必要である。また高齢者理解への授業展開で、どのタイミングで『サザエさん』を取り上げるのかについても工夫の余地があるだろう。

2つめは、学生同士の学びの繋がりである。本研究では《学習意欲のはずみ》とは、『サザエさん』を読んだ疑問が逆に学びのインセンティブとなっている、ということがわかった。だが一方で、『サザエさん』という教材に限界を感じた学生も存在する。それは学生自身の学習の力量の違いや、多様な志向性の問題が背景にあるのではないかと推測される。しかし、そのような学生と一緒に学ぶことの相乗効果があるはずである。木下ら⁸はグループワークでの学習の効果について、「学びと感じていなかった事柄を、他の学生の発表の刺激をうけて、学びと意識化できる」や「共通した学びを確認しあい、新たな学びが得られる」と述べている。限界と感じていても、実はまだ『サザエさん』から学べる可能性も否定できない。また『サザエさん』を読んだだけでは理解できないことでも、グループディスカッションの中で理解できる可能性もある。今回の授業展開もグループワークで行ったが、グループワーク授業方法の検討も必要であろう。

おわりに

学生のもつ活字や文章に対する否定的な感情を背景に、学生の世代(主に18才~20才)と介護を必要とする高齢者との年代の差は、高齢化社会においてますます広がり、日常生活における学生世代と高齢者世代の関係も、核家族化社会において希薄である中で、介護福祉士を目指す学生の高齢者理解をどのように教育していくのか、大きな課題である。漫画や『サザエさん』の教材としての授業効果における可能性を追い求め、今後も教育研究を続けていく次第である。

謝辞

今回の研究における調査インタビューに、快く協力していただいた、大阪健康福祉短期大学介護福祉学科の学生の皆さんに感謝申し上げます。

また、参考文献の取り寄せを快く、そして迅速にいただいた図書館司書の中山雅子さん、堀川智子さんに感謝いたします。

最後に、論文執筆にあたって協力してくれた、鴻上、石田両家族に感謝いたします。

脚注・引用文献

1) 長谷川町子1997『長谷川町子全集』第一巻サザエさん1から第二十三巻サザエさん23朝日新聞社を使用。

2) 下川歌史(編)2000『明治・大正家庭史年表』河出書房新社および、同2001『昭和・平成家庭史年表』河出書房新社を主に使用。

3) グラウンデッド・セオリーアプローチ (Grounded Theory Approach) とは、1960年代のアメリカ社会学から始まった質的研究法である。ある事柄の内部にどのような現象が起こっているのかについて、その概念を発見し、その概念同士の関係性を明らかにする目的をもつ。その方法は、ある事柄について語られたその語りを逐語化し、それらをプロパティに整理し概念化していく。その際、語りから得られた全ての逐語に着目しなければならない。

4) 研究対象とした授業は、調査対象とした学生、介護福祉学科Ⅰ部2年は2008年11月5日・12日、1年は2009年6月9日・16日、介護福祉学科Ⅱ部3年は2008年10月23日・30日、2年は2008年10月9日・10月16日、1年は2009年6月11日・18日にそれぞれ実施した。

5) 根岸貴子、内村恭子、大川尚子、岡田美佐子、高橋公子、脇坂由紀子2005「視聴覚教材による看護学生の高齢者の日常生活の捉え方」『老年看護』第36回 pp.39-41 日本看護協会出版会

6) 宮口恵美子、山下容子、深田一枝2006「視覚教材を用いた医療事故防止教育」『看護教育』第37回 pp.470-472 日本看護協会出版会

7) 竹村美恵2008「マンガを用いた学習効果－高齢者虐待に至った介護者への理解に関する一考察」『日本看護学教育学会誌18巻学術集會講演集』P.222 日本看護学教育学会

8) 木下香織、古城幸子2006年「3年課程の2年次老年看護学実習での学生の高齢者理解－グループワークによる学習効果と今後の課題－」『老年看護』第37回 pp.169-171 日本看護協会出版会

参考文献

戈木クレイビル滋子2005『グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』医学書院

木下康仁(編)2005『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂

古城幸子、木下香織2007「高齢者理解を広げる映画教材の教育的効果」『新見公立短期大学紀要』第28巻 pp.1-6 新見公立短期大学

小田 史、石田京子2007「事例演習を軸にした介護技術演習授業の効果～フォーカスグループを用いて～(第1報)」『大阪健康福祉短期大学紀要』第7号 pp.67-74 大阪健康福祉短期大学

名倉順子、生田晴美2009「生活者としての高齢者を理解するカリキュラム構築の必要性」『神奈川県立平塚看護専門学校紀要』14号 pp.9-15 神奈川県立平塚看護専門学校

小田 史、石田京子2008「事例演習を軸にした介護技術演習授業の効果～フォーカスグループを用いて～(第2報)」『大阪健康福祉短期大学紀要』第8号 pp.103-114 大阪健康福祉短期大学

石田京子2008「当事者参加型フィールド授業が当事者に与えるナラティブセラ皮的効果」『大阪健康福祉短期大学紀要』第8号 pp.115-122 大阪健康福祉短期大学

木下香織、古城幸子2006年「3年課程の2年次老年看護学実習での学生の高齢者理解－グループワークによる学習効果と今後の課題－」『老年看護』第37回 pp.169-171 日本看護協会出版会

The Effects and Problems of Helping Students Understand Old People, Using a Comic Book, “Sazae-san” as a Teaching Material

Keita kogami*, Kyoko Ishida**

Abstract

In the class of guiding care work practice, we used “Sazae-san” as text books to help students understand the days in which old people lived, and interviewed 20 students who were willing to assist our survey.

The results were analyzed with a grounded theory approach. Because of a students’ tendency to dislike reading sentences, the everyday life of the ordinary people depicted in the comic strips was found to be more useful for the students to learn the days experienced by senior people.

Some students were stimulated to learn further the contemporary history of our country. However, it should also be noted that “Sazae-san” alone is not sufficient enough for students to learn the days in which old people lived.

Keywords: guiding care work practice, understanding old people, a comic book, “Sazae-san”

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address:
〒590-0014 8-2 Tadei-Cho,Sakai-Ku,Sakai City,Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Care and Welfare
E-mail : k.kougami@kenko-fukushi.ac.jp
**Osaka College of Social Health and Welfare